

2021 年度

国 語
(2 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

① 芭蕉の『おくのほそ道』は、おそらく日本の古典文学のなかでも一番愛されている作品ではないかと思えます。一つには、日本には日記文学や旅日記の伝統が強いからでしょう。日本人はそういう旅日記を読むのが非常に好きなのです。

しかし、もちろんそれだけではありません。芭蕉の作った俳句はたくさんありますが、その傑作の大部分は、『おくのほそ道』の旅の間に作られたのだと私は思っています。

もしだれか恐ろしい暴君が私に、芭蕉の俳句のなかで一番いいものを選び、そうでないと殺す、と言ったとすれば、私はやはり、

A 夏草や 兵どもが夢の跡

という句を選ぶのではないかと思えます。

これは毛越寺(注1)という寺で作った句ですが、芭蕉が目の前の原に夏草の茂るのを見て、ここで戦ってここで死んだ兵士の、これがその夢の跡なのだ、と詠んだものです。どうして十七の文字でこれだけ内容のある句が作れたのか、私にはわかりません。

この句には、日本人の学者があまり指摘(してき)しないよさがあります。この句には、オという発音が非常に多いのです。たとえばローマ字で *tsuwamono-domo ga* と書くと、Oの音が多いことがよくわかります。洋の東西を問わず、詩人たちはOという音は悲しい音だと考えていました。アメリカの有名な詩人ポー(注2)はOを使って *Raven* (「大鳥」) という作品を書いています。

② もしこの句を「夏草や兵隊たちが夢の跡」としたなら、全然つまらないものになってしまいます。「兵隊たち」としても「兵ども」と意味は同じですが、まるで日清戦争の兵たちといった感じになります。

芭蕉は自分の俳句の音というものにも敏感(びんかん)だったと思われる。もう一つ、山寺(注4)で作った句を例にあげましょう。

B 閑かさや岩にしみ入る蟬の声

これを漢字仮名まじりの文で書くと、そうたいして面白い句ではないかもしれませんが、ローマ字で Shizukasaya iwa ni shimiru semi no koe と書くと、*が多いのに気がつきません。この*は、これ自体がセミの声に似ています。芭蕉がセミの声を聞いて、その音を自分の句のなかに入れたのだと考えてもいいのではないかと私は思っています。

『おくのほそ道』には好きなどころがたくさんありますが、一番好きなのは多賀城の城趾を訪ねた芭蕉の描写です。^(注5)

C むかしよりよみ置ける歌枕、おほく語り伝ふといへども、

(訳) 昔から歌に詠まれてきた名所は、たくさん語り伝えられているが、

山崩れ、川流れて、道あらたまり、石は埋もれて土にかくれ、

(訳) (今では) 山は崩れ、川は流れを変え、道は新たにしかれ、石は土の中に埋もれて隠れ、

木は老いて若木にかはれば、時移り代変じて、その跡たしかならぬ事のみを、

(訳) 木は枯れて若木と世代交代している。時が移り変わって、名所の跡がはっきりしないものばかりだ。

ここに至りて疑ひなき千歳の記念、今眼前に古人の心をけみす。

(訳) しかし、この石碑は間違いなく千年前の記念碑で、今これを見ると、昔の人たちの気持ちをはっきりとわかる。

行脚の一徳、存命の喜び、羈旅の労をわすれて、泪も落つるばかりなり。

(訳) これが旅の徳であり、生きていることの喜びであって、長旅の苦勞も忘れてしまい、感激で涙が落ちるばかりだ。

これはどういうことかというのと、現在私たちが多賀城に行くと、壺の形をした石碑が小さなお堂の中に遺されています。網戸越しによく見ると、文字が見えます。その石碑に彫つてある文句は実に無味乾燥で面白くありません。この城が何年に建てられ、何年に改修されたか、ここから四方の国境まで何里あるか、といったことが書かれているだけです。

芭蕉に深い印象を与えるようなものではありませんが、けれども芭蕉はこの石碑を見て、これはまちがいなく昔のもの、眼の前に昔の人を見る思いがすると言って、^③非常に感激します。行脚の一徳、まだ生きてあることの喜びを、この石碑を見て感じました。

芭蕉は『おくのほそ道』の「夏草や兵どもが夢の跡」の句の前に、中国の杜甫の詩句「国破れて 山河あり」を引用していますが、^④ここでは芭蕉は、それは嘘だと言っているのです。山河はないかもしれない。「山崩れ、川流れて、道あらたまり、石は埋もれて土にかくれ」て、自然そのものはなくなるのだと言っています。では何が永遠にのこるのかというと、それは言葉なのです。人間の作った詩歌こそがのこるので

す。
仮に日本のすべての山が崩れ、川が全部枯れても、日本人の書いたもの、『おくのほそ道』のようなすばらしいものは永遠に遺ると、私は思いたいのです。

Y 『おくのほそ道』は後の文学に大変な影響を与えました。先に山崎北華の『蝶之遊』を引用しましたが、もつと有名な人たちも芭蕉と同じコースを歩き、それぞれ何かに感激しています。文学だけでなく、与謝蕪村の描いた絵巻物もあれば、高浜虚子の作った『奥の細道』という能もあります。いろいろな意味で日本文学における『おくのほそ道』の大切さが表われています。

(ドナルド・キーン『古典を楽しむ 私の日本文学』より一部改変)

(注1) 毛越寺…岩手県平泉町にある寺。平安時代の藤原三代の栄華を伝える。

(注2) ポー…エドガー・アラン・ポー。詩人・作家。

(注3) 日清戦争…一八九四年〜一八九五年、日本と清国の間で行われた戦争。

(注4) 山寺…山形県山形市にある寺。立石寺のこと。山寺の通称で知られる。

(注5) 多賀城の城趾…宮城県多賀城市にある奈良時代の城跡。

(注6) 杜甫の詩句「国破れて 山河あり」…杜甫は八世紀に活躍した中国の詩人。「国破れて 山河あり」は「戦争によって国は破壊されてしまったが、山や川は昔と変わらない」の意。

問一 — 線①「芭蕉の『おくのほそ道』は、おそらく日本の古典文学のなかでも一番愛されている作品ではないかと思えます」について、次の問いに答えなさい。

(2) この句を詠んだときの芭蕉の様子としてもふさわしいものはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 芭蕉は、勢いよく茂る夏草と、兵たちの戦い方を重ねあわせ、武将たちの勇ましさにあこがれている。
- イ 芭蕉は、勢いよく茂る夏草から源氏の兵たちの勢いを感じ、目の前で起きた戦いを懐かしんでいる。
- ウ 芭蕉は、勢いよく茂る夏草しかない、かつての栄華の地を見て、その荒廃ぶりにがっかりしている。
- エ 芭蕉は、勢いよく茂る夏草と、奥州藤原氏の栄華を重ねて、自分の憧れの地を訪れ、感動している。
- オ 芭蕉は、勢いよく茂る夏草と、かつての奥州藤原氏の栄華を対比し、人間のはかなさを感じている。

問三 — 線②「もしこの句を「夏草や兵隊たちが夢の跡」としたなら、全然つまらないものになってしまいます」とありますが、筆者がこのよ

うに考える理由は何ですか。ふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「兵隊たち」では、この句全体に漂う「O」という音の持つ悲しみが感じられなくなってしまうから。
- イ 「兵隊たち」では、「兵ども」の持つ古風さがなく、戦争の悲惨さを鮮明に描き出してしまうから。
- ウ 「兵隊たち」では、近代的な軍隊を連想させ、昔のことを思い浮かべている感じがしないから。
- エ 「兵隊たち」では、「O」の代わりに「i」や「e」の音が使われ、音の統一感が失われるから。
- オ 「兵隊たち」では、「兵」という古来から日本語が有している美しさがなくなってしまうから。
- カ 「兵隊たち」では、西洋の詩人たちが苦しみや悲しみを表現する音の響きにならないから。

問四 Bの句について、次の問いに答えなさい。

(1) Bの句には切れ字が使われています。それは何ですか。本文から一字でぬき出しなさい。

(2) *にあてはまる言葉は何ですか。三字で答えなさい。

(3) Bの句の説明として、もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 岩にしみ入るくらいセミが鳴いていることを強調し、セミの鳴き声のにぎやかさを感じさせる。

イ セミの声が岩にしみ入るようで、この句の詠まれた山寺の静けさをよりいっそう感じさせる。

ウ 山寺の岩の巨大きよたいたいさとセミの激しい鳴き声が重なり合って、山寺の夏の暑さをより感じさせる。

エ 激しく鳴くセミの声をまるで吸い込んでしまうかのような、そびえる岩の巨大さを感じさせる。

オ 「岩」で連想される山寺に訪れた喜びと、「セミ」によって連想される夏の到来とらいの喜びを感じさせる。

問五 — 線③「非常に感激します」とありますが、芭蕉は石碑を見て、何に感激しましたか。Cの古文の中からもつとも適切な部分を五字以内でぬき出し、答えなさい。

問六 — 線④「ここでは芭蕉は、それは嘘うそだと言っているのです」とありますが、筆者は芭蕉と杜甫の考え方の違いをどのように考えていますか。六十字以内で説明しなさい。

問七 本文における筆者の考えとしてふさわしいものは何ですか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 芭蕉の「夏草や」の句や杜甫の詩に描かれているように、どんなに栄えた人間も必ずいつかは滅んでしまう。

イ どんなにめまぐるしく時代が変わったとしても、自然だけはいつまでも変わらずに存在するものである。

ウ たとえ文明や自然が失われても、古人がのこした素晴らしい言葉は、いつまでも残ってほしい。

エ 社会や自然は変わることがあるため、優れた日本語だけは、変えずに後世に残さなくてはならない。

オ 多くのジャンルに渡り、後世の文学者に影響を与えた『おくのほそ道』の素晴らしさは言うまでもない。

カ だれにとつても人生とはあてのない旅のようなものであり、思わぬ人や物との出会いと別れに満ちている。

問八 — 線Xのように、松尾芭蕉は「おくのほそ道」で、数多くの俳句を作りました。ここでは「おくのほそ道」の旅や芭蕉の残した多くの俳句について、取り上げたいと思います。

次の地図は「おくのほそ道」の旅の行程図です。地図の日付は芭蕉がその土地に滞在していた日付です。



『おくのほそ道』旅程図

○— 芭蕉の足跡
 数字は曾良随行日記の日付
 ()内は現在の地名



(出典 ビギナーズクラシックス 日本の古典『おくのほそ道(全)』より一部改変)

(1) 地図から、芭蕉は四月の一ヶ月で約何キロメートルの道のりを歩いていたことがわかりますか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 約一〇キロメートル イ 約五〇キロメートル ウ 約一五〇キロメートル
エ 約三〇〇キロメートル オ 約五〇〇キロメートル

(2) 地図から、芭蕉は次の日付に現在の何県に滞在していたことがわかりますか。次の中から適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 五月十日 ② 六月十日 ③ 七月十日
- ア 栃木県 イ 福島県 ウ 宮城県 エ 岩手県 オ 山形県
カ 秋田県 キ 新潟県 ク 富山県 ケ 石川県 コ 福井県

(3) 『おくのほそ道』では、本文に取り上げられている俳句以外にも、多くの有名な句があります。

五月雨の 降り残してや I 光堂

五月雨を 集めて早し

II

荒海や III に横とう 天の川

① ——線I「光堂」は岩手県の平泉にある建物で、世界遺産にも選ばれているものです。その名称としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 鹿苑寺金閣 ろくおんじきんかく イ 平等院鳳凰堂 びやうどういんほうおうどう ウ 東大寺南大門 エ 日光東照宮 オ 中尊寺金色堂 ちゆうそんじこんじきどう

② II には日本三大急流のうち一つが入ります。 II に入るものとしてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 利根川 とね イ 北上川 きたがみ ウ 最上川 もがみ エ 信濃川 しなの オ 黒部川 くろべ

③ III には日本海の島の名前が入ります。 III に入るものとしてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 淡路 あわじ イ 壱岐 いき ウ 隠岐 おき エ 佐渡 さど オ 小豆 しょうど

問九 — 線Yのように、芭蕉は後世の多くの俳人に影響を与えました。

IV につるべ取られて もらい水 千代女

菜の花や 月 ^Vは東に 日は西に 与謝蕪村

VI の子 そのけそこのけ お馬が通る 小林一茶

※つるべ…縄 ^{なわ}や竿 ^{さお}をつけて井戸の水を汲 ^くみ上げる桶 ^{おけ}

(1) 千代女の俳句は IV のつるが「つるべ」にからみつき、それを外して井戸の水を汲むのは忍 ^{しの}びないことを詠んだ句です。

IV に入る植物は何ですか。ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ひまわり イ たんぼほ ウ あじさい エ さくら オ あさがお

(2) — 線V「月」とありますが、このときの月の形として、ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 新月 イ 三日月 ウ 上弦 ^{じょうげん}の月 エ 満月 オ 下弦の月

(3) VI に入る生き物は何ですか。ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すずめ イ つばめ ウ かえる エ たぬき オ きつね

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

トン、トトトン、トン。ピーイー、ジャラン。トン、トトトン、トン……。

夜の神社に、太鼓やかねや笛の音が響く。その澄んだ音色が霧のように裏の山へと上っていく。ぼくは祭りが好きだ。笛や太鼓の音を聞くと心が浮きたつ。

「ええか。上手にやろうと思わんでもええんよ。『神様、ありがとう』という気持ちをこめて、ゆっくり、ゆっくり動けばええけね」

田中さんは、先導役の沙也につきっきりだ。バツグンの運動神経を誇る沙也だけど、「しゃぎり」独特のゆったりした動きはどうも勝手が違うようだ。苦戦している。見とれていたら、

「壮太。ぼやっとしとらんとうちらも練習、練習」

と、ゆりにどやされた。狐師の役をゆずった雄大も、真剣そのものの顔つきで練習している。ぼくはあわてて練習にもどった。

サルのは役は大変だ。さんさん悪さをしたあげく狐師に追い詰められて命乞いの踊りをするんだけど、その動きがきつい。四つんばいで数歩歩いてはひざ立ちで立ち上がり、上向きにそろえた両手をくるりと回して拜む。これを永遠か？と思うほど延々と繰り返すんだ。足がつりそうになる。腰が痛い。ゆっくりした動きなのに汗が A 垂れてくる。だからようやく鉄砲で撃たれてころころと転がるシーンでは、「やっと死ぬる」とうれしくなつたくらいだ。

いよいよ祭りの当日。

朝からぼくたちは衣装を着けるために集会所に集まった。

「雨がやんでよかったわ」

着付けを担当するのは集落のおばさんたち。忙しく手を動かす間もにぎやかなおしゃべりはとまらない。今日はお祭りを見るために遠方に住んでいる子どもや孫たちが帰ってくるので、親たちが来るのを楽しみにしているぼくたち同様、集落の大人たちも浮かれている。

「いやあ、きれい」

田中さんの奥さんのはしゃいだ声に振り返ると、紫の着物にはかま姿の沙也が立っていた。花笠の下の小さめの顔、大きな瞳に真っ赤な口紅。

サルさけの叫びが聞こえた気がした。ぼくはもう少しで泣きそうになった。のどをつまらせながら、命乞いの踊りおどりを続けた。時間がとまったかのようだった。その瞬間、

ドォーン！

大太鼓が打ち鳴らされ、鉄砲が火を噴いた。

③ そんなわけなのに、ぼくの目には確かに銃口じゆうこうからふき出す赤い火が見えた。

ぼくは B とムシロの上を転がった。そして全身の力をこめて立ち上がり、もう一度拜む。そのとたん、

ドォーン！

ふたたび鉄砲が火を噴いた。

そうして、「お旅練ねり」は終わった。

④ 「ほう」というため息とともに、会場から大きな拍手はくしゅがわいた。ぼくの胸は達成感でいっぱいだった。大きな虹にじマスを釣り上げたときと同じ、びつしりとどこにも隙間すきまのない満足感がぼくの胸を埋めていた。

ムシロからおりたぼくのそばに、一人のおじいさんが近寄ってきた。

「ありがと、ありがと。わしは今まで畑をあらすサルが憎にくうてならんかったんじゃが、あんたを見とつたら、えさがのうなって山を下りざるをえなくなつたサルにはサルの悲しみがあるゆうことが、ようわかつた。今日はあんたから大切なことを教えてもらうた」

「ほんとうにありがとな」とがっしりした手で握手あくしゅされ、ぼくも反射的に「ありがとございます」と頭を下げていた。

——よかった。

無事大役をやり終えてよかったのか、おじいさんが喜んでくれてよかったのかどつちかはわからなかったけれど、とにかく「よかった」と心の底から思った。

お面を取って、ぼくはようやく大きく息をついだ。ずっと息苦しいのを我慢がまんしてたんだ。山から吹いた一陣いちじんの風が、ぐっしよりぬれたぼくの顔の汗をかかわしてくれた。

「壮太」

背後から声をかけられて振り返ると、母さんがいた。

「あれ？来てたの」

「うん」

なんだか浮かない表情だ。

「父さんとまりっぺは？」

「ゆうべ夜中にまりが熱を出したのよ。夜勤明けの父さんと交代して母さん一人で来た」

そうか。だから遅おそくなったのか。

「ふうん……。見てくれた？」

「……見た。最後のほうだけ」

歯になにかはさまったような、はっきりしない言い方が気になった。なにが言いたいんだ？

「どうして、サルなの？」

「は？」

「だって、みじめな役じゃない」

——みじめ？ どういうこと？

「さんざん命乞いして、そのあげく殺されちゃうなんて、母さん、見てて、いたたまれなかった」

あー、そうか、と思った。母さん、がっかりしたんだ。サル役のほくに、がっかりしたんだ。^⑤さっきまでふくらんでいた気持ちが急速にしぼんでいくのがわかった。母さんはいつだってそうだ。ぼくが華々はなはなしく活躍かつやくすることだけを期待する。縁⑥えんの下⑦の力持ちなんていやなんだ。

「沙也、こっち向いて。そうそう。みんなに見せるんだからいい写真撮とらなきゃ」

すぐ横で沙也のママのはしゃいだ声でした。

「ハいう？」

両手ピースでポーズを決める沙也は、満面の笑みだ。母さんがわずかにほおをゆがめた。

「帰れよ」

気がついたら言っていた。飛び出た言葉に自分でびっくりして、「なに言ってるんだ、おれ？」って思ったけど、もう遅い。

「どういうこと？」

きよとんと母さんは、ほくの顔を見つめた。その鈍感どんかんさにいらついた。

「帰れ！」

今度ははつきりと言いつつ放った。

帰れ、帰れ。母さんはなんにもわかってない。サルサルの悲しみも、ほくの達成感も、なにもかも！わきあがった怒いかりを持って余したほくは、駆け出していた。早く一人になりたかった。祭りの人ごみを縫ぬってお寺の坂道を駆け上った。

(八東澄子『ほくらの山の学校』より一部改変)

問一 次の表は「お旅練り」の配役表です。次のⅠ～Ⅳにふさわしい言葉を、本文からぬき出し、答えなさい。

先導	配役
I	名前

おやす	配役
Ⅱ	名前

猟師	配役
Ⅲ	名前

Ⅳ	配役
たくと	名前

サル	配役
「ほく」	名前

問二 A・ B に入る言葉は何ですか。ふさわしいものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号は一度しか使え

ません。

- ア どずどず イ ころころ ウ こんこん エ しとすと オ ぼたぼた カ がたがた

問三 — 線①「太鼓判を押されていた」、⑥「縁の下の力持ち」の慣用句の意味として、もっともふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

①「太鼓判を押す」

- ア 相手の言うことに調子を合わせて、機嫌をとる。
- イ 他人を喜ばせようとして、大げさにほめる。
- ウ 人物や品物の質が、たしかであると保証する。
- エ 自分の言っていることが間違いないと、固く信じる。
- オ 相手の発言の正確さを、十分に確かめる。

⑥「縁の下の力持ち」

- ア 相手の身になって考えたり行動したりすること。
- イ 大胆だいたんに行動して人の注目を浴びること。
- ウ 人が見ている時と見ていない時で行いが違うちがこと。
- エ 相手を喜ばせるために世話をやくこと。
- オ 他人のためにかげで苦労や努力をすること。

問四 — 線②「しばらくは、目の前で繰り広げられている光景に見とれた」とありますが、このときのぼくはどのような気持ちだったと考えられますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実際には見えないものに対して、集落の人間たちみんなが感謝の気持ちを伝えることへの期待。

イ 集落全体が長い間神への感謝を表していることを知り、自分がその役目を果たせるかどうかという恐れ。

ウ 世界には神様という大きな存在があり、その存在によって自分があることを知ったことへの驚き。

エ 祭りの持つ神聖さと生きた歴史を感じ、自分もその一部として組み込まれていることへの感動。

オ 今まであこがれていた伝統的な祭りに、ようやく自分も参加することができたという興奮こうふん。

問五 X に入る言葉としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なんてこんなことになるんだ、人間がにくい！

イ 死にたくない、死にたくない、もっと生きたい！

ウ もうだめだ、このまま殺されてしまうんだ……

エ なぜ助けてくれないのか、見捨てられるのか……

オ 絶対に悪いことはしないから、見逃して！

問六 —線③「そんなわけなのに、ぼくの目には確かに銃口じゆうこうからふき出す赤い火が見えた」とありますが、なぜそのように見えたのですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 命乞いの踊りを繰り返す中で、まるでサルになったように感じ、本当に鉄砲で撃たれたように感じたから。

イ 命乞いの踊りを踊ることに疲れて、早く終わりにしたいと願うあまり、撃たれたとかんちがいたから。

ウ 鉄砲があまりにも精密に作られていたため、本物だと思いきみ、実際に撃たれたと思いきんだから。

エ サルの役に入りこみ、周りの音が聞こえていなかった結果、大太鼓の音と鉄砲の音をまちがえたから。

オ 本番では鉄砲を撃つ予定ではなかったのに、まちがって実際に火薬をつめて発射してしまったから。

問七 —線④「ほう」というため息」とありますが、会場がどのような雰囲気きふうきに包まれていたということですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもたちが楽しそうに演じている様子を、ほほえましい思いで見守っている雰囲気。

イ 悪さをするサルに対して怒りを感じ、こらしめてくれた猟師りやうしに満足している雰囲気。

ウ サルが劇的な最期さいごをむかえ、すばらしい演技が終わったことに感動している雰囲気。

エ ゆかいな場面から一転して、深刻な状態になってしまったこととまどっている雰囲気。

オ サルが命乞いの踊りをしたにもかかわらず、殺されてしまったことに悲しんでいる雰囲気。

問八 — 線⑤ 「さっきまでふくらんでいた気持ち」とありますが、どのような気持ちですか。四十字以内で答えなさい。

問九 — 線⑦ 「母さんがわずかにほおをゆがめた」とありますが、この時の「母さん」の気持ちとしてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア みじめな役なのに一生懸命役になりきっている「ぼく」を、かわいらしいと思っている。

イ 「ぼく」の写真を撮ったとしても見せたい人がいないことに気がついて、不快に思っている。

ウ きれいな衣装の沙也と「ぼく」を見比べて、みすばらしい姿の「ぼく」を残念に思っている。

エ がっかりしている「ぼく」に遠慮えんりょしているが、はしゃいでいる沙也をほほえましく思っている。

オ 「ぼく」が落ち込んでいるのに、堂々と写真を撮る沙也のママを見て、図々しいと思っている。

問十 次のア～オは、この小説の特徴とくちょうを説明した文章です。もっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登場人物のセリフを短く入れることにより、祭りのにぎやかさをあらわしている。

イ 「ぼく」の心情を描写することにより、「ぼく」と家族の関係を明らかにしている。

ウ ささまざまな登場人物の視点で語ることにより、それぞれの心情を分かりやすくしている。

エ 踊りや人々の様子をくわしく描くことにより、集落の興奮や神への思いを示している。

オ ささまざまな擬音語を用いることにより、「お旅練り」に臨場感を与えている。

〔三〕

次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① カドデを祝う。
- ② サイシンの注意。
- ③ ヤサしい問題。
- ④ 太陽が水にハえる。
- ⑤ おつりをもらい、ケンザンする。
- ⑥ 悪寒がする。
- ⑦ 解熱剤を飲む。
- ⑧ 大願成就